『水野弘元博士米寿記念論集　パーリ文化学の世界』

茨田通俊

本書は、現在のパーリ仏教学界の最高権威である、水野弘元博士の米寿を記念して出版されたものである。水野博士の業績については、敢えて説明するまでもなく、世に送り出された著作、論文は枚挙にいとまがない。筆者も含め多くの学徒が、『パーリ語辞典』を初めとする、数々の成果の恩恵に浴していることからも知り得るように、博士のパーリ仏教研究に対する貢献と影響は絶大なるものがあろう。この水野博士の米寿に際し編纂された本書もまた、学界第一人者の記念論文集にふさわしく、充実した内容を誇っている。

さて、本書の特徴としては、従来の論文集にあるような、分野の異なる研究論文の無作為な集成とは違って、パーリ語及びパーリ文化に関する一定の分野を扱っていることが挙げられる。対象を限定しているとはいえ、いわゆるパーリ仏教が仏教発祥以来の長い歴史と、南アジア、東南アジアを中心とした広大な文化圏をもつことから、パーリ学の扱うフィールドは広範で多岐にわたっている。こうした点から本書は、前田惠學教授のはしがきにあるように、「パーリ文化研究のあらゆる分野を包括して、従来個別に行なわれていたパーリ文化研究の諸分野を統一的にまとめ、かつ今後の研究の進むべき方向を示すこと」を意図して編集されている。

パーリ学は、これまでの文献研究を中心とした学究的な研究に加えて、近年は文化人類学的なアプローチも盛んに行われる等、さらに新たな展開を見せようとしている。そうした研究方法の多様化や扱う範囲の拡大を反映して、本書はⅠ言語・文献研究、Ⅱ文化研究、Ⅲ教理研究、Ⅳ歴史研究の四部から成り、各々三～五、全部で十七の論文により構成されている。いずれも学界を代表する学者の手によるもので、全体として幅広い研究分野を遺漏なく網羅している。まさしく書名が示す通り、本書自体が「パーリ文化学の世界」そのものを形成していると言えよう。

したがって、そうした本書の性格上、各論文は特定のテーマのもとに、研究論文というよりもむしろ方法論の紹介、資料の提供を中心に、問題点の提起や将来の展望をも含めた総合的なものを意図して書かれている。よって本書は、単なる記念論文集に止まらず、パーリ学研究の過去を回顧し、将来の動向を示唆するものとして、読みごたえのある内容となっている。

なお、収容論文のすべてにわたって詳細に論評するには、充分な紙数がなく、また筆者の力量の及ぶところでもないので、およその紹介と若干の批評に止まることをご容赦願いたい。

まず、「Ⅰ言語・文献研究」はパーリ語に関する研究史が中心で、五編の論文より成る。雲井昭善教授の「パーリ語辞典の編纂」では、辞典編纂の歴史を回顧し、チルダース、リス・デ

ヴィッズの両辞典、及び現在も進行中の事業である『批判的パーリ語辞典』(*CPD*)、『パーリ三蔵コンコーダンス』等馴染みの辞典の意義と特色が述べられ、最後にわが国における辞典編纂状況についても触れられている。自らも『巴和小辞典』出版の経験をもち、現在も新たな辞典編纂を進めている雲井教授ならではの要を得た紹介を通して、我々が平素利用する辞典類の便益を再認識させられ、編纂過程における労苦のほどが偲ばれる。こうした辞典類の充実が、パーリ学研究の発展を支えてきたことは、否定できない事実であろう。

石上善應教授による「パーリ語文献の翻訳」は、主としてわが国におけるパーリ語文献の翻訳研究の歴史を辿るものである。その中で、漢訳経典中心の仏教研究からの転回となった、原典の直接的研究の導入に始まり、パーリ語研究の発展に甚大な役割を果たした『南伝大蔵経』の公刊や、近年の厳密でかつ一般にも理解し得る翻訳の試みについて言及する。そして、最近のパーリ語研究の多様化は、新しい翻訳の展開を促すであろうと展望している。原典の翻訳は、学問研究を飛躍的に進展させると同時に、仏教思想の一般への流布の責をも担っている。最後に石上教授は、原文に忠実な翻訳と流麗な現代語訳が共にあることが、本来の思想文化研究の基調となると結んでいる。

次に、橋堂正弘教授の「新しいパーリ語文献の展望——Pāli texts printed in Sri Lanka in Sinhalese characters」は、スリランカの Polvattē Buddh datta 長老の *Pāli Sāhityaya* 第二巻に見られる、成立の新しいパーリ語作品について解説を施している。取り上げられた作品には、シンハラ語による関連文献も付加されており、中には写本の現存状況に触れたものもある。綱要書から史話、仏伝の類、文法書のほか医学書、書簡に至るまでの計一二五の膨大な文献一覧は、スリランカにおけるシンハラ文字の刊本をほぼ網羅しており、たいへん利用価値の高いものとなっている。

森祖道教授の「注釈文献の種類と資料的価値」は、アッタカター、ティーカーといったパーリ注釈文献を列挙した上で、その資料的価値について論じている。まず、アッタカターに関しては、文献研究・翻訳資料、教理思想研究資料、言語研究資料、歴史・地理・社会・文化などの研究資料としての有用性を、また、ティーカーについても、具体的な事例を挙げながら資料としての価値を説いている。森教授には、既に『パーリ仏教註釈文献の研究』というこの分野の先駆的研究成果があり、本論も豊かな見識に満ちた論及がなされている。教授が指摘するように、パーリ語の注釈文献は、資料の一大宝庫として研究上無視できないものである。未開拓に近い分野だけに、資料として無限の可能性を含んでおり、その研究は今後ますます重要視されることであろう。

湯山明博士の「仏教文献学の方法試論」では、仏教学における文献学的研究方法について、積極的な論を展開している。研究者の予断に基づく資料の扱いや、学術的論拠を欠く論文等は、文献学の基礎訓練の欠如から来る文献学的方法の誤用例であるという。こうした謬見の蔓延を憂慮する博士は、徹底した原典

批判の作業を勧め、その際に、隣接した文化学の諸分野を通して培われる直観力と洞察力の必要も説いている。全体を通じて湯山博士の主張は、文献学の基礎訓練、即ち関係言語の正確な修得と典籍の批判的考究の重要性に力点が置かれている。伝統的な文献研究に対する数々の問題点の指摘は、研究者に自らの研究姿勢に対する反省と再考を促すものとなっている。

「Ⅱ文化研究」は、おそらく本論集の中でも最も注目すべき研究分野であろう。近年の仏教研究は、新たに文化人類学的、社会学的な研究方法も採られるようになり、その成果は着実に蓄積されつつある。ここでも新しい視点から仏教を捉えようとした、興味を引く論文が並んでいる。

まず最初は、前田惠學教授の「パーリ文化圏の展望」である。パーリ文化圏は、上座仏教伝播の原点となったスリランカや、それとは異質の文化をもつ東南アジアの国々によって形成されている。ここでは、パーリ仏教徒が多数を形成する地域としてスリランカ、タイ、ビルマ、パーリ仏教徒が少数民族をなす地域としてインド・バングラデシュ、マレーシア・シンガポール・インドネシアの実態を説明する。異なった民族や政治状況下で、上座仏教といっても一様でない形態を有していることが窺える。さらに、あらゆる人間文化の側面を包含する文化の体系として仏教を捉え、従来の文献研究に限定した方法を超えて、現に生きている仏教を対象とした研究の必要を提唱している。そして現代仏教研究の課題として、仏教の存在形態を分析し、現代への対応を明らかにすることを挙げている。以上の前田教授の主張は、今後の仏教研究を展望するものとして傾聴に値する。

続く奈良康明教授の「『出世間』と『世間』――インド仏教文化の構造理解のために」では、仏教徒の生活様式としての仏教文化の様相について、興味深い論考がなされている。この中で奈良教授は、仏教の本義とされる信仰や教理、即ち「出世間」レヴェルと、民間信仰的な諸観念や儀礼、即ち「世間」レヴェルの二つの関わりを考える。前者は自我を否定し、実存的に自己を見つめる「自己凝視のレヴェル」であるのに対し、後者は、かくありたいという欲望を満足させる方向において成立する「自己充足のレヴェル」である。奈良教授は、呪術、祈願儀礼、通過儀礼、輪廻の観念等の例を通して、この両レヴェル間の複雑な相互関係について検討する。そして、両者の間には明らかなレヴェルの差があって、「出世間」レヴェルの観念のみを仏教とする意識が強く、さらには「世間」レヴェルの諸観念と儀礼を、「出世間」レヴェルと連結させようとする志向がはたらいていることを指摘している。

杉本卓洲教授の「パーリ文化と美術――上座部と仏塔崇拝」は、美術資料により、仏教信仰の様態について解明を試みる論文である。インド各地に存在する仏塔の欄楯や門柱等には、多くの仏伝図や本生図が描かれていることがある。これらの彫刻図は、古代インドの思想や文化を反映しており、文献における伝承を実証する手がかりとなるものである。杉本教授は、『インド仏塔の研究』の成果に見るように、こうした美術作品のもつ学術的な価値に早くから注目して、研究に取り組んできたひ

とりである。本論では、仏教美術の源泉とも言うべき仏塔と、元来その崇拝を受容し難いはずのパーリ上座部の長老たちとの関係について、バールフトやサーンチーの仏塔、ナーガールジュナコンダの大塔等美術的資料を駆使しながら、精緻な論を展開している。教授も言うように、彫刻等の美術的作品は、製作年代も文献に比して明確であり、資料としての利用価値は高い。それだけに仏教美術の研究は、これからの開拓が期待される分野である。

石井米雄教授の「最近における上座部仏教の社会科学的研究について」は、近年活発な、現代上座仏教に対する社会学的研究活動の成果について紹介するものである。南方諸国の現代上座仏教に関する最近の著作を対象の国別に取り上げて、簡潔な説明がなされており、変化と進展に富む分野の研究における最新の情報を提供してくれている。

片山一良教授の「仏教人類学――その立場と領域」では、「仏教人類学」とは何かということを構造的に分析している。先の奈良論文同様仏教を人間の学として改めて問い直そうとする、新しい方法論の展開が見られ、注目に値する論文である。ここでいう「仏教人類学」は、「仏教学」に主題を求め、「人類学」の方法を採用することにより成り立つ。片山教授は、「仏教学」が仏教を「仏の教え」と捉え、「仏」ないし「法」の研究を目指すのに対し、「仏教人類学」は、仏教を「仏の教えをめぐる文化」と捉え、「仏の周縁」ないし「法の周縁」、もしくは「僧」ないし「律」、さらには「仏教徒」の研究に向かうものであるとする。そして、こうした「仏教における人間研究」としての「仏教人類学」は、「テキスト（聖典）」から「コンテキスト（文化）」へ、そしてまた「テキスト」へ戻って理解しようとするもの、即ち実態調査に基づきながらも、必ず教義研究に関わるようなものでなければならない、という基本的立場を示している。また、先の石井論文と共に、末尾に付した引用文献目録が非常に有益である。

「Ⅲ教理研究」には、水野弘元博士の「研究の回顧」のほか、桜部建、長崎法潤両教授の論文が配されている。本論集中最も長大な量を誇る水野論文は、博士自身とその周囲の研究の回顧録となっている。これによると水野博士は、パーリ語原典のみならず漢訳仏典にも広く親しんでいるようで、その多方面に及ぶ研究範囲には驚くばかりである。まさに、博士の研究過程がそのままわが国のパーリ仏教研究の歴史であると言っても過言ではない。また、博士自身の成果以外に、関連する研究資料にも触れられており、各文献の特徴と研究内容に対する解説は、的を得て示唆に富んでいる。これらはひとえに博士の研究の奥深さを物語るもので、飽くことなき知的探求心と並々ならぬ精励の跡が、行間より伝わってくる。

桜部教授の「パーリ・アビダルマ研究――その過去と将来」は、南方七論（論蔵）から後代の教義学的論書に至る、パーリ・アビダルマ教学一般について、近代における内外の研究成果を紹介したものである。実に多くの研究が取り上げられており、それらを発表年代順に辿ることにより、アビダルマ研究の足跡

を知ることができる。また、今後の展望として、当分野の研究は多様化の方向にあることを指摘し、幾つかの注目すべき新しい研究の事例を挙げている。

長崎教授の「パーリ仏教研究とジャイナ教研究」は、原始仏教研究の中でも近年重視されつつある、ジャイナ教文献との比較研究について論じたものである。同じ沙門の宗教である仏教とジャイナ教の間には、多くの共通性が見られ、ジャイナ教文献との比較は、パーリ仏教研究にとっても不可欠なものである。長崎教授は論文の前半において、原始仏典、ジャイナ教聖典に共通する術語、平行句として、dhamma-dipa（法洲）等の例を示し、両者に共通の源流や相互の影響を探りつつ、両教の根本教義との関連にまで言及している。後半では、パーリ仏典に見られるジャイナ説として、『沙門果経』におけるニガンタ・ナータプッタ説を取り上げ、未だ定説のない sabba-vāri の解釈について論じている。原始仏教とジャイナ教との比較研究の具体的な事例を示すものとして、いずれも説得力のある確かな考察がなされている。また、単なる文献学的比較研究に止まらず、テーラヴァーダ仏教との比較のために、現在インドに存続するジャイナ教教団の調査の必要を説いている点にも注目してよい。

最後に「Ⅳ歴史研究」として、四編の論文が収められている。まず、山崎元一教授の「パーリ語文献によるインド古代史研究」は、パーリ語文献から知られる古代インドの政治、経済、社会について論述したものである。パーリ語文献には、仏教教理の他に、古代インドの生活文化を伝える記述が多数存在する。論文では幾つかの例を示しながら、部族共和制国家やマガダ、コーサラ等の王国の政治機構、仏教興起当時の都市生活や村落の様相、四ヴァルナに代表される社会構造等に論及していて興味深い。これらは、パーリ語文献がインド古代史を研究する上で、資料の宝庫であることを物語っており、教理面を離れた研究資料としての可能性を示していて面白い。

塚本啓祥教授の「上座部教団史研究の問題点と課題」は、上座部仏教がスリランカに伝播する以前の、インド亜大陸における史的展開について、その問題点の解明を試みている。本論では、上座部を表す Theravāda, Vibhajjavāda の二つの名称について、文献上での意味の変遷を辿った上で、大衆部、説一切有部、雪山部といった他部派との関係を、文献はもちろん考古学的資料も駆使して考察することにより、部派仏教成立の背景について再検討を加えている。部派分裂当時の史実に関しては、各部派によって伝承を異にしており、不明確な部分が多い。ここでは、先学の研究を適宜参照しながら、様々な角度から緻密な考究を展開しており、充分に評価できる。

生野善應教授の「南方上座部の史的展開」は、南方上座部、即ちセイロン（スリランカ）上座部を受容しながらも、多様な実態を呈する東南アジアの上座部仏教の歴史的過程について論じるものである。インド文化が浸透し、上座部仏教が伝播した東南アジアの民族諸国では、各々が独自の開教伝説を有する。これについて生野教授は、民族的対抗意識の結果自国の優位性

を示すためであり、古代民族国家の緊張関係を反映したものと推論する。そして、この南方上座部仏教の歴史的展開をビルマ地域、タイ地域、カンボジア、ラオス地域の三つについて辿る。セイロン上座部の教義と教団組織を共有しながらも、地理的な環境の違いや、国家興亡の歴史的背景、さらに民族性にも左右されて、各国の上座部仏教が独自の発展を遂げてきたことが知られる。

東元慶喜教授の「わが国における上座部仏教研究の過去と将来」では、日本人として最初に上座部仏教文化について実践した、釈興然師の生涯が中心に描かれている。渡航先のスリランカで具足戒を受け、帰国後も南方僧団の移植に尽力した、求法僧の意気軒昂な姿を窺い知ることができる。その他、南方仏教文化のわが国への輸入の試みや、当事国との交流についても関説している。

以上個々の特色ある論文が相寄って、パーリ文化学を集大成するひとつの研究書を形作っており、パーリ文化研究を包括的に捉えようとした本書の目的は見事に果たされていると言えよう。また、適切な課題の指摘も随所に見られ、新たな方向性を示唆するものとして、本書が、同分野の研究における今後のひとつの指標となることは疑いない。さらに、文献の紹介、一覧を豊富に含むことから、資料的な価値も評価できる。惜しむらくは、学の国際的な広がりを考慮して、海外のパーリ仏教学者の論文を数編加えることも一考ではなかったかと思われる。

とはいえ本書をもって、パーリ文化研究の全体像を把握することは充分に可能である。よって本書は、パーリ仏教関係を初めとする研究者は言うに及ばず、これからパーリ学研究を始めようとする若い学徒にも、この上ない便益を提供し得るものであると確信する。

（平成二年六月三〇日、春秋社、菊判、四六八頁、定価一四〇〇〇円）